林 健太郎著

ワイマル共和国

ヒトラーを出現させたもの

中公新書

27

中公新書 27

林 健太郎著

ワイマル共和国

ヒトラーを出現させたもの

中央公論社刊

林 健太郎（はやし・けんたろう）
1913年(大正2年)に生まる．1935年，東京大学文学部西洋史学科卒．現在，東京大学教授．専攻，西洋史，歴史学．
著者 『世界の歩み』
『歴史の流れ』
『明日への歴史』
『史学概論』

ワイマル共和国
中公新書 27
© 1963年
検印廃止

昭和38年11月18日 初版
昭和48年 1月31日 19版

著 者 林 健太郎
発行者 山 越 豊

本文印刷 精興社
表紙印刷 トーブロ
製 本 小泉製本

発行所 中央公論社
東京都中央区京橋2—1
振替東京34 電話(561)5921代

まえがき

「ワイマル共和国」という名前は一般の読者には必ずしも周知でないかもしれないが、これは要するに第一次世界大戦後からナチスが政権をとるまでのドイツの歴史である。そしてここ二、三年来、「アイヒマン裁判」や映画「夜と霧」などによって、ナチスに対する関心はわが国でも非常に高いので、その前史としてのワイマル共和国史もかなりの興味をもって読んでいただけるのではないかと思う。

今日ワイマル共和国の歴史を書くことは、決して容易でない。それはドイツの敗戦とともに厖大な公私の文書が明るみに出され、それにもとづく研究が文字どおり日進月歩の勢いで進んでいるからである。本書はできるだけそれらの新しい研究の成果に立脚したつもりであるが、なにぶんかなり急いで執筆したので、思わぬ誤りなきを保しがたい。幸いわが国にはこの方面の専門家がかなりおられるので、誤りを発見された場合にはご教示いただければ幸いである。

史実の正否よりももっとむずかしいのはその解釈である。これは歴史一般に通ずることであるが、ことにこの時期のように現代に近く、また我々に身近な問題が提出されているところでは、どうしても叙述に史観が結びつきやすい。私も私自身の立場によってこの本を書いたので、事実

を述べながらその間に私の意見を積極的に述べることを辞さなかった。これは「すべての歴史は現在の生の関心から生まれる」（クローチェ）、あるいは「歴史を書くことは信念の行為である」（ビアド）といわれる以上、当然のことであろう。

しかしその場合でも、学者として守らねばならぬ準則が存在するはずである。「生の関心」といい、「信念」といっても、それが単なる願望であったり、独断であったりしてはならない。社会科学や人間学にも現在における認識の水準というものがあって、それにもとづかなければ学問的著作とはいえないであろう。そういうものに通暁するのはむずかしいことであるが、私はその点もできるだけ努めたつもりである。

こういう面倒な理屈よりも、実は私にとって、一番興味があったのは、よかれ悪しかれ、この十四年の不幸な時代の歴史を担い、それを形づくったエーベルト、グレーナー、ローザ・ルクセンブルク、ノスケ、シュトレーゼマン、ゼークト、シュライヒャー、ブリューニング、シャハト、パーペン等々の人々の人間像であった。うまく書けば小説に劣らぬ面白い物語ができるにちがいない。私にその腕がないのが残念である。

一九六三年十月

著者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

目次

まえがき

第一章　共和国の成立　2
ワイマル共和国の問題　敗戦　マックス内閣　皇帝退位問題　キール暴動　ベルリンの政変　オップロイテとスパルタクス　共和国の成立

第二章　民主主義か独裁か　17
仮政府と労兵協議会　仮政府の性格　労兵協議会思想の由来　対立の激化　労兵協議会全国大会　エーベルトとグレーナー　人民海兵団事件　独立派の脱退

第三章　一月蜂起　34
共産党の成立　一月蜂起　蜂起の鎮圧　ローザ・ルクセンブルク　軍人の復活　ナチスの萌芽

第四章　憲法と平和条約　50
国民議会の召集　大統領エーベルト　憲法の制定と内容　ヴェルサイユ

条約　条約への批判

第五章　カップ一揆　61

各地の騒乱　ミュンヘン共産政権　バイエルンの右翼化　匕首伝説
カップ一揆　ノスケの退場　ゼークトと国防軍　社会民主党の退陣

第六章　内外の難問　78

賠償問題　国境紛争　独立社会民主党の分裂　共産党の混迷　マンス
フェルト蜂起　ラッパロ条約　ラーテナウの暗殺　共和国保護法

第七章　一九二三年の危機　97

ルール占領　インフレーション　中産階級の没落　シュトレーゼマンの
登場　バイエルンの異常事態　ミュンヘン一揆　共産党の新戦術　中
部ドイツの革命計画

第八章　シュトレーゼマン時代　116

ドーズ案　内政の不安定　二つの裁判　ヒンデンブルク大統領　ロカ
ルノ条約　ゼークトの失脚

第九章　経済復興と社会主義　129

経済復興とその弱点　社会民主党の責任　ラートブルフの批判　君主財

産没収と建艦の問題　ヘルマン・ミュラー内閣

第十章　経済恐慌の襲来　141

ドーズ案よりヤング案へ　ヤング案反対闘争　シュトレーゼマンの死
経済恐慌の衝撃　ヒルファーディングとシャハト　ミュラー内閣の倒壊
シュライヒャーの暗躍

第十一章　大統領内閣　157

緊急令と解散　ブリューニングの誤算　ナチスの躍進　議会政治の防衛
ブリューニングの外交　独墺関税同盟　経済恐慌の深刻化　ナチスと共
産党　ハルツブルク戦線　シュライヒャーとナチス　ヒンデンブルク再
選　ブリューニングの罷免　ブリューニングと経済恐慌

第十二章　共和国の最期　182

男爵内閣の成立　プロイセンのクーデター　社会民主党と抵抗　二つの
選挙　パーペン、シュライヒャーの反目　シュライヒャー内閣　パーペ
ンの復讐　シュライヒャーの失脚　ワイマル共和国の終焉　ワイマル共
和国失敗の原因

参考文献　209

訳語について　213

附　表　214

人名索引　220

ワイマル共和国

第一章　共和国の成立

ワイマル共和国の問題

一九一八年十一月九日、ベルリンに革命が起こってドイツ帝国は倒れ、新しい共和国が生まれた。その共和国は翌年、ゲーテと縁(ゆか)りの深い小都市ワイマルにおいて新憲法を採択し、その故をもって史上にワイマル共和国と呼ばれる。

ワイマル憲法は当時、史上最大の民主的憲法と呼ばれた。しかしこの民主的憲法を持った共和国は長続きしなかった。この革命に至るまで、ドイツはホーエンツォルレルン家の皇帝によって支配されていたが、この帝国は、同じ君主国でもイギリスのように議会が政治の中心をなす民主的な君主制ではなかった。といってそれは、帝政ロシアのような専制帝国であったのでもない。

ロシアと異なって、ドイツ帝国には憲法もあれば普通選挙にもとづく議会もあった。そして法律は議会を通過しなければ施行され得なかったから、政府はやはり議会および議会に代表される政党にある意味では依存していた。しかしそれにもかかわらず、それが議会政治でなかったとい

うのは、政府が議会から全然独立に構成されていたからである。

首相以下の大臣は議会とは関係なく皇帝から任命され、議会にではなく皇帝に対して責任を負っていた。そして、例外的な場合を除いては議席を持つ政党員が大臣に任命されることはなく、大臣はもっぱら官僚から選ばれたのである。すなわち日本でいえば、明治から大正にかけてのいわゆる藩閥政府、そして昭和になって五・一五事件以後の超然内閣がそれに当たる。その他軍事外交に関する事項が皇帝の大権に属して議会の権限外にあり、軍部が政府の外にあって強大な力を持っていたことも戦前の日本と同様であった。このような制度が革命によって一挙にとり払われ、君主制が共和制に変わったばかりでなく、議会に基礎をおく政党政治が初めて行なわれることとなったのである。

このワイマル共和国がどうして永続しなかったか、せっかく民主的な制度をつくりながらそれが運用できなかったのは何故か、そしてナチスのような恐るべき怪物がそのなかから出てきた原因はどこにあるのか、それが今日ワイマル共和国を研究するものにとっての第一の課題である。それは現代のドイツにおいて特に切実であるが、それはまたわれわれにとっても決して無縁の問題ではない。

敗　戦

一九一八年のドイツ革命は、いうまでもなく第一次世界大戦の敗北の結果起こったものである。この戦争が一九一四年に開始されて以来、戦局は圧倒的にドイツの優

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

勢裡に推移しているように見えた。ドイツ軍は主要な戦闘においては一度も負けたことはなかったし、その占領地域は東西にわたって広く敵地にはいり込んでいた。そして報道は軍の厳重な統制のもとにおかれていたから、国民は最後の段階にいたるまで自国が負けるとは考えていなかった。しかし客観的に見れば、開戦の一ヵ月あまりのちに行なわれたマルヌ河畔の戦いにおいてドイツ軍が一挙にフランス軍を撃滅することに失敗して以来、ドイツの究極的な勝利はむずかしいものとなっていた。ドイツの予想に反して戦争は東西両戦線にわたって膠着(こうちゃく)し、それを突破することはもはや不可能であったのである。

戦争が長期化するにつれて国民生活は次第に苦しくなり、開戦とともに戦争を支持したドイツ社会民主党のなかから、戦争の継続に反対する一派が分離して、一九一七年に独立社会民主党という新政党をつくった。一九一七年と一九一八年には首府ベルリンにストライキが起こり、ことに一九一八年のストライキは参加人員四十万人におよぶ大規模なものであった。しかしそれでも、独立社会民主党の一部の極左派を除いては敗戦を望むものはなかったし、またそれを考えるものも少なかった。戦争の終結を望むものは増えたが、それは連合国との妥協によって、ドイツの面目をいちじるしく傷つけることなく平和を結び得ると考えられたからであった。そしてこの点では戦争継続に反対した独立社会民主党の人々といえども変わるところはなかったのである。

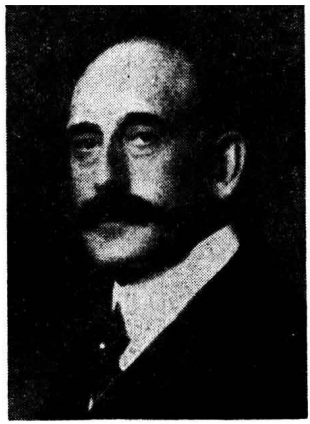
敗戦の色が濃くなったのは、一九一八年の三月から七月にかけて行なわれた西部戦線の大攻勢

が失敗した時である。七月から連合国は反撃に転じ、ドイツ軍は初めて陣地を捨てて後退に転じた。戦線が崩壊することはなかったけれどもドイツ軍の退却は続き、八月の上旬には参謀本部もいまや戦局が絶望であることを認めた。しかし彼らはなおその悲観的な状況をつとめて国民に知らせないようにしたので、国民は依然この戦争が敗北に終わるとは思っていなかった。

しかしそれだけに、この幻想が破れたときの反動は恐るべきものである。そしてこの反動は九月末にやってきた。九月二十九日参謀総長ヒンデンブルクと参謀次長ルーデンドルフは突然政府に通牒を送って、いまや一刻も早くアメリカ大統領ウィルソンの十四ヵ条を受諾して休戦条約を結ばなければならぬ、そのためには国制を改めて議会に立脚した政府をつくらなければならぬと要求してきた。

ヒンデンブルクは戦争当初のタンネンベルクの戦いでロシア軍に奇蹟的な勝利を収め、以来国民から偶像的な崇拝を受けてきた人物であるが、政治的には無能であって、ルーデンドルフのロボットにすぎなかった。そしてルーデンドルフは一九一六年参謀次長の職について以来、陸軍を掌握しただけでなく、軍の力を背景として政治に干渉し、全ドイツをほとんど彼の独裁下においた辣腕家である。しかも彼はそれまで戦争反対論を厳重に禁圧し、自由主義者や社会主義者の主張する国制改革、議会の重視に強く反対してきた人物であった。その彼が突然掌（てのひら）を返すように敵側の条件による休戦と彼が最も反対してきた議会主義とを要求してきたのである。国民は初め

て戦争がまったく失われたことを知り一挙に従来の支配者への信頼を失った。そして以後ドイツは石が急坂を落下するように革命に突入するのである。



バーデン大公マックス

マックス内閣

ともかくルーデンドルフの要求によって、当時の首相ヘルトリングは辞職し、数日の後バーデン大公マックス内閣が成立した。マックスは政党人ではなかったが、つとに自由主義的貴族として知られた人物で、その閣僚はドイツ史上初めて議会の多数を代表する政党員によって構成された。この内閣に参加したのは社会民主党、中央党、進歩人民党の三党である。社会民主党の党首エーベルトは入閣しなかったが、彼と並ぶ実力者であったシャイデマンが政府に参加し、中央党からはこれまですでに議会においてその活躍を認められていたエルツベルガーが入閣した。

ドイツ最初の政党内閣がこの三党によって占められたのは十分理由のあることであった。戦争最中の一九一七年に、この三党は共同して「平和決議」というものを議会に提出し、それを通過させたことがあるからである。当時のドイツ帝国議会は一九一二年の選挙によって選ばれたものがそのまま継続していたが、この選挙では社会民主党が第一党、中央党は第二党で、この三党を

合わせれば優に議会の過半数を制することができたのである。

社会民主党は元来マルクス主義を標榜する政党であって、この政党が大戦勃発とともに戦争支持の態度を明らかにしたことはいささか世界を驚かせたけれども、これはそれなりに理由のあることであった。マルクスもエンゲルスも、またその弟子で一九一三年の死に至るまでドイツ社会民主党の党首であったベーベルも、決して国防ということを否定したことはないのである。そして彼らはいずれもロシアのツァーリズムがヨーロッパ社会主義の最大の敵であると説いており、ことにエンゲルスは一八九二年に書いた「ドイツにおける社会主義」という論文のなかで「フランス共和国がツァーのロシアと結ぶならばドイツの社会主義者は遺憾ながらフランスと戦うであろう」といっている。

ドイツ社会民主党の戦争支持はロシアのレーニンからは「裏切り」と罵られたけれども、多数派社会党（独立社会民主党が分裂した以後の社会民主党は一般にそう呼ばれた）の人々にとってはこれは十分名目の立つことであって、彼らは裏切りをしたとは少しも考えていなかったのである。そしてこういう立場で戦争に参加した以上、彼らの戦争支持の態度は右派諸党のそれとはおのずから異なっていた。戦争が長びくにつれてドイツ国内では「戦争目的」ということについての論議が起こってきたが、その際、右派諸党が「勝利の平和」すなわち戦勝の結果を確保し占領地の併合を認める平和以外はあり得ないと主張したのに対し、彼らは領土の併合に反対し、敵国

民との親善を回復する「和解の平和」を唱えたのである。これはその主唱者の名をとって「シャイデマン平和」と呼ばれた。

しかし「和解の平和」を唱えたのは社会民主党だけではなかった。進歩人民党を支持する良心的な学者たちのあいだにも「勝利の平和」に疑念を持つものが多かったし、中央党のエルツベルガーも戦局の不利を知ってこの考え方に転じた。そしてこのエルツベルガーが音頭をとって、このような趣旨にもとづく「平和決議」を三党共同で成立させたのである。したがって、ドイツの敗北が明らかとなり、国家の民主的改革が必至となったときに、この三党が議会を代表して政府に参加したのは当然であった。

皇帝退位問題

しかしこのような急ごしらえの「上からの民主化」によって簡単に問題が片づくものではなかった。マックスは首相就任とともにウィルソンと電報を交換して即時休戦交渉を開始することを懇請したが、ウィルソンはこれまで戦争を遂行してきたものの退陣が必要であり、ドイツの民主化の保証が未だ十分でないとしてこれに応じようとはしなかった。ウィルソンは明らさまにはいわなかったけれども、これは明らかに皇帝の退位が条件であることを意味する。しかもこの間、戦闘は依然継続され、毎日多数の兵士が戦場で生命を失っているのであるから、国民のあいだに皇帝の退位を要求する声が期せずして起こってきたのは当然であった。

皇帝ウィルヘルム二世が賢明でかつ国民を思う心が強かったならば、この時自発的に退位したであろうし、そうしたならば彼の孫の手に帝位を譲ることができたかもしれない。しかし即位以来、奇矯な言動によって失政の多かったこの皇帝は、その最後の局面においてもっとも暗愚の君であることを示した。彼はこの重大な時に突然ベルリンを去ってベルギーのスパーにあった大本営におもむき、それによって一層首都の民心を彼から離反させた。マックス首相はしきりに皇帝の側近者に働きかけて皇帝から退位の宣言を引き出させようとしたが、皇帝には依然その意志がなく、周囲の軍人たちもあえて退位を口にする勇気がなかった。そして遷延日を送るうちに待ち切れなくなった民衆のなかから革命が起こったのである。

キール暴動

ドイツ革命の口火はキール軍港の水兵によって切られた。この戦争では終始イギリス海軍が制海権を掌握していたので、ドイツの主力艦隊は出撃の機会が少なく、水兵は軍港に日を送ることが多かった。このような状態のもとでは厭戦気分が起こりやすく、すでに一九一七年にキールにおいて水兵の集団的な反抗運動があった。この事件はただちに鎮定され、その首謀者は死刑に処せられた。しかし一九一八年十月末、すでに敗戦が明らかとなったにもかかわらず、海軍が捨身の攻撃を敢行しようとして艦隊に出動命令がくだると、この無謀な命令に対してまず北海岸の軍港ウィルヘルムスハーフェンにおいて水兵の反抗が起こり、それがすぐキールに飛火してここに大規模な叛乱となった。十一月四日キールに碇泊する軍艦、地上の兵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton